

# 現象学的質的研究の射程

現象学は研究方法として使えるのか

○佐藤泰子（京都大学 大学院 人間・環境学研究科）

キーワード：現象学，質的研究，フッサール，ハイデガー，メルロー＝ポンティ

## 目的

1990年以降、質的研究に現象学が用いられはじめ、現象学的研究が注目されるようになって久しい。ベナー・ルーベラらが、人間の苦しみを捉えるために現象学的人間論を提唱したことは、看護研究に現象学が取り込まれていった契機になった。ベナーらに触発された看護研究者は、デカルト的二元論的機械論で患者を捉えることに無理があることに気づいていく。そこで患者の体験を分析するために現象学を質的研究に持ち込むことになるのである。しかし、現象学を用いた研究は多様であり、明確な方法論の言語化が困難で現象学的質的研究を目指す者は「現象学」そのものの前で立ちすくむ。現象学は、「事象そのものへ」という根本精神は受け継がれていくが、現象学の創始者であるフッサール自身も幾度かの転回をとげたし、ハイデガー、メルロー＝ポンティなどフッサールに続く現象学者らも独自の現象学を展開してきた。そのことが、現象学を研究方法として取り込んでいくなかで多様な研究方法を産んできた原因でもあろう。そこで、本発表では、現象学の概念、現象学的質的研究者による体験分析の道筋とはどのようなものなのかを概観し、現象学的質的研究の有用性を探る。

## 現象学概観

はじめに、現象学的質的研究においてしばしば援用されるフッサール、ハイデガー、メルロー＝ポンティの現象学を概説し、実際にどのように質的研究に応用されているのかを確認する。

### フッサール現象学の「還元」

フッサールは、人は自然的態度に生き続けているかぎり、あらゆるものごとは習慣的に実体的に把握され、さまざまな先入見をとおして物との交渉がすすめられていくので、世界の自明性を克服するために現象学的還元<sup>1</sup>を方法として唱えた。これは「事象そのものへ」接近し世界の根拠を問うための方法である。この「現象学的還元」が研究方法への応用可能性を開く1つの手札となっている。

### ハイデガーの存在論的現象学的解釈

ハイデガーの存在への問い<sup>2</sup>は、結局、現存在が「いかに在るか」という問いであるという現象学的人間論にいたる。ハイデガーの人間論に関する概念として「世界内存在」「道具存在」「気づかい」「投企性」「時間性」などがある。質的研究にハイデガーの思想が応用される際は、当事者の苦悩を存在論的に解釈する方法を用いる。

### メルロー＝ポンティの身体論の現象学<sup>3</sup>

完全な「現象学的還元」は不可能であるとメルロー＝ポンティはいう。我々は、還元を繰り返しても世界と我々の間に張り巡らされた志向の糸を断ち切ることはできない。世界を受

け取る感覚は、ほかならぬ我々の身体を通じてのことなのである。客観的な説明がなされるどころの世界の手前で我々が「生きられている」世界とは、知覚の世界であり、この知覚を生み出す原点は、他ならぬ我々の身体である。身体をもって経験したその当の事柄をことばに紡ぐとき、我々には適切なことばが用意されておらず、むしろ語りながら経験が構成されていく。語る時のことばの奥にある経験流を現象学的に捉えたい研究者は、できるだけ判断停止によって「生きられている」世界を解釈していくことになる。

## 現象学的質的研究の実践

現象学的質的研究の実践は看護研究に散見される。たとえば西村<sup>4</sup>は、植物状態にある患者への看護実践のあり方を現象学的に明らかにした。インタビュー後のデータを文脈に留意して繰り返し読み、気になる表現や語り方が示すことを読み、語りの流れを追いながら分析する。このとき「視線がからむ」「手の感触が残る」といった看護師の生きられた経験から植物状態患者と看護師とのはっきりとは見てとれない交流についてメルロー＝ポンティを援用し、自己と他者とがいまだ未分化な原初的前意識的な地層における運動志向性を解明した。

村上<sup>5</sup>は、ビデオカメラのように語りを通して感じられたあらゆる動きをキャッチしながらデータを分析するという。つまり分析者の感情は動かさず、データにある感情の運動を捉まえる作業をする。また繰り返しデータを読むことで分析者が非人称化する。さらにノイズ（言い間違い、言い淀み、反復する言葉、方言、唐突な話題の飛躍、トーンの変化など）を重要な分析の手がかりとする。看護師の体験、自閉症者の体験を現象学的に分析し、普遍的構造を取り出した。

## 結論

### （現象学的質的研究の意味）

経験とは個別の身体を通じてのものであるから、数学的、統計的データに回収されえない。そこで現象学的質的研究は、経験の個別性にこだわるが、個別の経験の背後にある構造を取り出すことを目指し、了解可能で共有可能な構造を取り出すのであるから、客観性に欠けるという批判は当たらないであろう。現象学的質的研究は方法論の困難さ多様性はあるものの人間の経験を理解する方法として質的研究の前に開かれていると考える。

(SATO Yasuko)

<sup>1</sup> エトムント・フッサール、イデーニ I、みすず書房

<sup>2</sup> マルティン・ハイデガー、存在と時間、岩波書店

<sup>3</sup> メルロー＝ポンティ、知覚の現象学、みすず書房

<sup>4</sup> 西村ユミ、語りかける身体、ゆみる出版

<sup>5</sup> 村上靖彦、摘便とお花見、医学書院